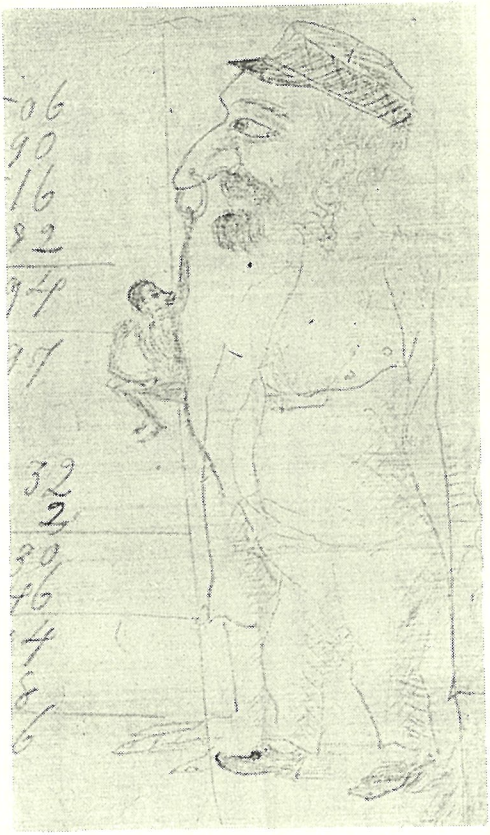
新島襄と絵心

島尾永康



第　1　図

新島襄が絵に巧みで、描くことを楽しみとしたことはよく知られているが、今回、学生時代のノートや教科書を詳しく調べる機会があり、改めてその感を深くした。私が調べたのは軍艦教授所時代のノート、フィリップス・アカデミーとアーモスト・カレッジ時代の数学、自然科学のノートと教科書で、これらに描きこまれた絵は、従来ほとんど紹介されたことがないらしいので、その中から数点を選んで、ここに御覧に入れたいと思う。

軍艦教授所時代は、教科書のオランダ語の原書が自由に入手できるわけでもなかったので、人から写本を借りては自分用の写本を作った。数式を入念に筆写しているうちに、つい図の方もいじってみたくなり、「斜陽之帰雁」(口絵)という凝ったものにしてしまったのであろう。これは文久二年(一八六二)六月七日の写本である。しゃがんで六分儀の観測の練習をする人物も、この時代の写本にある。小さい、なにげない絵だが、軽妙で、うまい筆致である。(第2図)

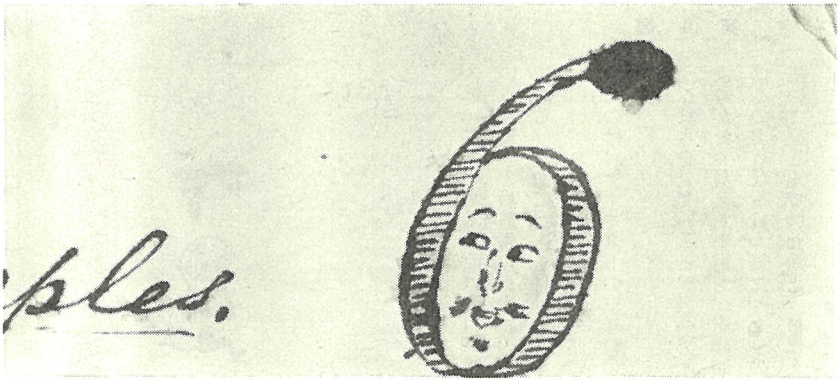
端正でクラシカルな「斜陽之帰雁」に対して、ユーモラスで、いささかグロテスクでもあるのが水夫と小猿の絵だ。(第1図)これは

ワイルド・ロヴァー号で航海中、毎日、緯度・経度の計算をして船の位置を定めた、その計算ノートに描きこまれている。この絵には一八六五年四月三〇日の日付があるが、五日前にジャワとスマトラの間の海峡を通過しているから、インド洋上であろう。髭づらの水夫の大きな鼻に鼻輪が通っており、尾の長い小猿がその輪にぶら下っている。よく見ると水夫は耳輪もつけている。両脚は短く、両腕は長くて地面に届き、手の甲は足よりも大いというデフォルメぶりである。実際に鼻輪を通した男を目撃したのか、空想のたわむれか、絵の下には、"I don't know this long man should belong to what race," とやや破格の英語のコメントがついている。奇抜な絵である。

第 2 図

一八六五年一〇月にフィリップス・アカデミーに入学後、毎日、神学生フリントを相手にイートンの算術書を勉強した。日本から持参した和紙を横長に綴じて作った大福帳型のノートは、翌年五月十一日には第六冊目になった。その表紙の6の中に、ひょうきんな表情の顔を描きこんでいる。(第3図)茶目っ気たっぷりである。よく見るとうっすらと洋服が描き添えられ、右手まで見える。

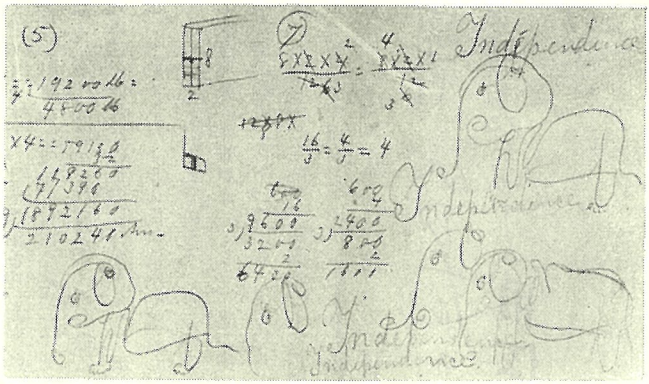
一筆描きのような象の絵と Independence の文字(第4図)も同じノートにある。Iの先の曲り具合と、



第 3 図

象の鼻先の曲り具合が相似形である。

教科書には必ず署名と日付を入れている。日付はおそらく購入の日であろう、第5図は、アーモスト・カレッジに入学した一八六七年秋から翌年にかけて、みっちり学習したルー



第 4 図

ミス著『平面および球面三角法』の見返しにあるもの。サインの下に葡萄の房と葉を描き、その葡萄の蔓が円い印章を吊し、これに尾長猿がぶら下っているという面白い構図になっている。印章の文字は「敬幹」、新島の元服名である。葡萄と猿は彩色されている。またもや猿だが、猿は新島のお気に入りのモチーフとみえ、何度もくり返し出てくる。

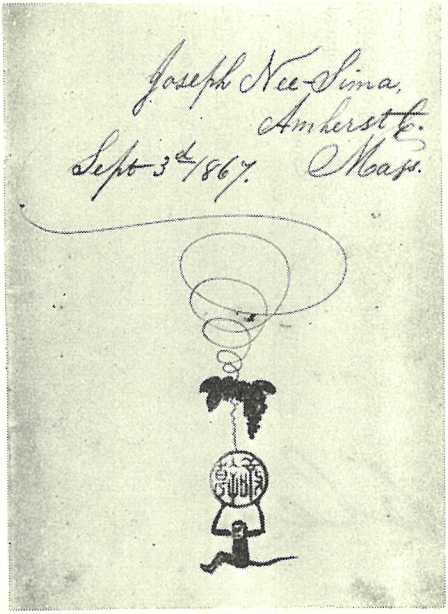
教授の似顔も沢山描いている。第6図は、

第 6 図

オルムステッド著、スネル改訂、『自然哲学入門』という物理学の教科書の裏表紙の見返しにある。肖像に台座を付けてあるのが面白い。スネル教授の物理の講義をきいたのは、アーモストの三年時の秋である。

これらを見ていると、いかめしく近よりがたく見える新島も、青年時代にはこのような茶目っ気たっぷりの絵を描いて楽しんでいたかと、ほほえましくなる。

（大学工学部教授）



第 5 図